

資料

デンマークの国制、一一〇〇年—一三三二年⁽¹⁾

トーマス・リース
鵜川馨 訳

一

デンマークのキリスト教化は、西暦一〇〇〇年にいたって、はじめて行なわれたのである。このようにヨーロッパ文明が比較的おくれて到達した国を対象として、遙か過去の時期の国制について講義を行なう約束をすることはいささか冒険であるかも知れない。しかし、部族法、特許状等従来国制史研究に利用されてきた史料だけでなく、故シユラム教授がヨーロッパ諸国の皇帝、国王の標識に関する諸研究で行なったように、印章、鑄貨、彫刻のような沈黙史料を用いて、国王の觀念を再現することを試みたい。そこで取扱う時代の限定は、一三三二年に八

デンマークの国制、一一〇〇年—一三三二年

年間にわたる空位期が開始し、全文が今日に伝えられている最古の文書が十一世紀末にまで遡及するからである。以下この時代の五つの中心的政治機関、即ち国王、近衛兵 (Hird)、王国の要人 (Mænd) (Meliores regni)、評議會、議會の觀念とそれぞれに承認された権限について論ずることとする。しかしここでは、史料制約から、国王の觀念についてのみ論じ、他の機関のそれは取り上げない。承認された権限についての議論のあとで、四つの領域、即ち、王位の継承、立法権、行政権、司法権について、それぞれの機関の相互作用について考察したい。

ある史料は、近衛兵を三千名、あるいは六千名と推定しているのに対して、他の史料は、遙かに少い数を示している。概数

は常に歴史家の疑惑をひきおこし、特に聖書やカール大帝のスペイン遠征に関する伝説に、三千名という数字があげられているので、ありえない数字としてしりぞけられよう。より信憑性のある史料は十二世紀初頭の近衛兵の規模をむしろ小人数の軍団として描いている。⁽²⁾十二世紀末の近衛兵は、デンマーク人だけでなく、外国人をも含んでいる。⁽³⁾少くとも十二世紀の初頭、行政的任務をおびる者とならんで土地所有者が、近衛兵のうちに認められる。一一三〇年代にすでに、封建の様相がデンマークにも認められ、近衛兵も封建貴族へと発展した。⁽⁴⁾この発展の過程で、その主要な権能即ち大逆罪 (crimen laesae maiestatis) ⁽⁵⁾に関する事件の審理が顕著な影響を受けたとはいえない。「メリオールレス・レグニ」と呼ばれた機関は、十二世紀にすでに存在し、世俗の貴族のみによって構成されていた。⁽⁶⁾司教は、十三世紀の初頭からはじめてこの機関の構成員となり、一五三六年の宗教改革のときまで、そうであった。「メリオールレス」は国王によって召集された。⁽⁷⁾十二世紀末にすでにこの集会に大逆罪に関する事件の司法上の権能が公に認められたが、立法上の権能は一一三〇年まで公式には認められなかった。⁽⁸⁾軍事上の事柄に関しては、この集会は国王と協力して、軍隊を召集し、⁽⁹⁾おそらくまた開戦する権能 (国王の評議会は後者の決定に参与した) ⁽¹¹⁾を有していた。⁽¹¹⁾この承認された軍事上の権能は、十三世紀後半に始まる。経済政策に関する「メリオールレス」の役割は、特に特定の商品の輸出許可、禁止に関しては、一三〇〇年頃

に認められたことを我々は知っている。⁽¹²⁾

国王は、当然数名の信頼できる人々の助言を求める必要を感じたのであろう、我々の取扱う全期間にわたって、個々の顧問官についての言及が見出される。しかし顧問官がいたとしても、必ずしも評議会が設けられたとはいえない。事実、政治機関としての評議会の存在は、一三二〇年の国王選挙に関する特許状に認められたが、その権能は明確にされていない。かえって、その文書には、ドイツ人は国王の「枢密院」の構成員にはなりえないし、枢密院議員は国王の顧問官として忠誠の誓をしなければならぬと記されている。⁽¹³⁾司教とその他の教会の高位聖職者も枢密院議員になりえた。このことは、十二世紀以降、⁽¹⁴⁾司教達が非公式の顧問官として登場するので当然のことであった。枢密院議員として、時に外国の大公、デンマークの大公、摂政期には皇太后、政府の現職の高官、退職した高官とならんで公的任務を帯びない世俗の貴族が認められる。⁽¹⁵⁾

この時期に、評議会が司法上の権能を認められた確実な証拠はないが (十五世紀の末にはその権能を獲得している)、⁽¹⁶⁾評議会に行政上の権能が与えられているひとつの証拠が存在する。立法上の権能に関して、我々はより確実な根拠を有している。即ち十四世紀の前半に、国王は、その顧問官に、修道院と都市に与える特権、⁽¹⁷⁾即ち財政問題に関する政策決定にあたって特定の権能を与えているからである。

一二八二年の特許状によれば、議会あるいは「ホフ」(hof)

(おそらくラテン語のクーリア (curia) のデンマーク語訳) は、少くとも年一回一カ月の予告をもって国王によって召集さるべきとされている⁽¹⁸⁾。場所は、海岸の都市、通例大ベルト海峡のニュボー (Nyborg) とされていた⁽¹⁹⁾。一二八二年の特許状は、議会の司法上の権能を認め、王領地に関する訴訟についてさえ認めたのである⁽²⁰⁾。一三二〇年と一三二六年の国王選挙の特許状は、議會を最上級の法廷と定め、ある特定の立法権を与えた⁽²¹⁾。特に財政問題に関する議會の行政上の権能は、一二八〇年代からはじめ特権に関する政策分野で、ついで、他の事柄について、認められた⁽²²⁾。頻繁に、行政権、立法権、司法権が、議會内で、国王の「忠臣」 (fideles) や「メリオールス・レグニ」等によって行使された。これらの集団が議會に出席したことは当然であり、また国王の顧問官も出席し、司教も議會の仕事に参加したのである。

二

残念なことに、史料は、これら機関の法的側面についてしか明らかにしない。国王についてののみ、我々はその觀念の發展を辿ることができる。その作業に取りかかる前に、この時期の国王権力を規制する諸規範を考察することとする。

王位継承を規制する原理は、ヨーロッパの他の諸国と同じく、世襲と選挙であった。当然国王は前者の原理を主張し、貴族は後者のそれを強調した。(一三二六年の国王選挙特許状は国王

デンマークの国制、一一〇〇年—一三三二年

が現に統治している場合、その後継者を選挙することを禁じ、国王の存命中に、別の方法で王位の継承を取りきめることを禁じている⁽²⁴⁾。国王とデンマークの一部の聖職者と係争が行なわれた過程で、国王は、世襲制の許可を教皇から得ることに成功した。一七七〇年から以降、国王はルンドの大司教によって戴冠を受け、その際、戴冠の宣誓を行なわなければならなくなった⁽²⁵⁾。

デンマーク政界の大立物、ルンドの大司教アブサロン (Absalon, 1158—1192) の書簡を引用している一九八八年の教皇の大勅書は、デンマークは二つの主要な法源、即ち王の立法と慣習を有すると述べている⁽²⁶⁾。十三世紀の四十年代までの間、二つの法原理が併行して存在していた。しかし国王は、着々と、王の立法を慣習法に対して優越せしめんと求めた⁽²⁷⁾。しかしながら、一二四一年から、ユラン法は、国王と地方 (即ちその政治的司法的集会) との間で、立法に関する権能の分割を定めたのである。即ち国王は、法案を提案し、地方 (議會) は提案された法案を通過させると。一二四一年の法によれば、国王に独自の立法権は、ある法が神の法の原理と一致しない場合にのみ限定され、この場合、他の諸機関の同意を得ることなく法を修正することができた⁽²⁸⁾。一三二〇年と一三二六年の国王選挙の特許状は、国王の立法上の権能にさらに制限を加えた。新しい法の制定は、全デンマークの同意を得て議會でなされねばならない。おそらく、一二四一年に、地方に関する立法に関して表明された諸原理を王国全体に適用することを意味したのである。しか

もこの二通の特許状は、(慣習法である)と否とを問わず、現行法の修正が議会において「賢人」(discreet)と「王国の要人」(members of the regni)とによってなされねばならぬと規定しているの⁽³²⁾で、現行法を国王のみによって修正する権限は、極度に制限されることとなった。ともあれ、国王は、新しい法を提案する統治権を留保したものとされる。

国王の行政上の権能を規定する諸規範は、教会の保護、弱者一般の保護、寡婦、幼児、巡礼、外国人、貧者の保護を国王に帰している。国王は、法律の保護を奪われた者を社会に復帰させるか否かを決定する権利を有し、一二八二年の議会の正式の設立とともに、国王は、議会を毎年召集する義務を与えられた。すでに指摘したように、「メリオール・レグニ」は、国王とともに封建軍隊を召集し、さらに、両者の協働が、開戦の決定に必要であった。

諸特権とは、文字通り原則に対する例外である。通常、国王の存命中、国王の収入の一部を受益者に与えることであった。⁽³¹⁾一二三〇年代には、経済状態は悪化し、より制約的な特権賦与政策を必要とするにいたった。他方受益者、特に宗教機関は、特権撤回権の無効を訴えた。そして一二四五年から一三二〇年にかけての時期のかなりの期間、この問題はデンマークの国王とデンマークの教会との間で争われた主要な問題となった。一二八二年の特許状は、ひとつの妥協を見出している。即ち国王の「忠臣」がその撤回を議会に説得しえた場合を除いて、特権

は取り消されることがない⁽³²⁾。一三〇四年の法に、類似の妥協が認められる。即ち、国王は特権を確認することを約束するが、その内容について拒否権を留保する⁽³³⁾。

国王に固有の司法権の存在は、十三世紀の初頭にすでに認められていたが、その詳細について、史料的に知りうるのは一世紀後である。例えば、国王は、家臣と陪臣との間の事件を裁判する封建的義務があり、さらに、一三〇八年、国王はその法廷を最も重要な修道院の管轄裁判所とした。⁽³⁴⁾一三二〇年代の選挙特許状は、国王の法廷を裁判所の階梯の中に組みこむことに成功した。即ち国王の法廷を地方裁判所の上位に、議会の下位に据えたのである。⁽³⁵⁾

国王は、究極的に危険な敵に対して身を護る手段を自由にしていた。しかし、(一二八二年に認められたが)⁽³⁶⁾土地問題に関して国王に訴訟手続きをすることが可能であり、一三二〇年代の国王選挙特許状は、国王の敵対者を保護する条項を含んでいたことが強調されるべきである。⁽³⁷⁾しかし国王の身体の安全はいかに護られたのであろうか。一一四〇年頃から、ローマ法、特に「大逆に関するユリウス法」(Lex Julia maiestatis)の強い影響をうけ、大逆罪を規定した法が存在した。司教、公爵(明白に国防に關し広汎な権限を与えられた役職者)、皇后、皇子、国王の腹心(collaterales)はすべて「王族」(membra regis)と見做され、主権者と同じ保護を享受した。⁽³⁸⁾十二世紀中葉から十三世紀中葉にかけて、国王の文書に、違反は大逆罪と見做されること

を見出すのである。明らかにこの定式は、特権に関してのみみられるのであって、偶発的な違反者が争うのは、書状そのものではなく、特権にもとづいてなされた処分であつたと考えてよい。換言すれば、処分権は財産権の一部であつて、特権に対する不服従は、特権によつて譲渡された収入（海外ではレガリア（regalia）と呼ばれた）に対する国王の権利と争うことを意味したのである。⁽⁴¹⁾

大逆罪（*crimen laesae maiestatis*）の概念は、十二世紀中葉から十三世紀中葉にかけて、大逆罪（*crime of high treason*）と同一であるといひうるが、国王もまた、レガリアに対する国王の権利と争うことを大逆罪とみなすという定義を認めさせようとしていた。

様々な機関の構成を検討した時に、近衛兵は、漸次封建貴族に発展したことを考察した。おそらく、近衛兵のメンバー（国王の腹心）もまた大逆罪を取扱う一一四〇年の法によつて保護されており、一二七六年の政府は、封建的事柄に関する法、就中領主の生命に対するその家臣の陰謀を取扱う法を提案したことは当然のことである。しかしこの法は通過しなかった。⁽⁴²⁾

三

さて、我々の関心を国王の觀念に向けると、四つの異なった形態、即ち国王の文書の前書き⁽⁴³⁾（*arungae*）、文字によらない公式の標識（一二〇〇年頃）、サクソー（*Saxo*）によつて編纂さ

デンマークの國制、一一〇〇年—一三三二年

れたデンマーク史、王族を聖者の列に加えんとの試みに明白に国王の觀念が表明されていることに気づくのである。

国王の勅書の前書きに、国王の三つの主要な義務、即ち国民の保護、宗教の保護、勸善懲惡が見出される。前二者の原理が十二世紀以来すでに見出されるのに対して、第三の原理は、十三世紀中葉にはじめてあらわれる。勿論、いくつかの前書きに、より明確に記されているとしても、いずれにせよ三つの原理の適用にすぎない。いくつかの前文には他の動機、例えば公平と正義とが述べられている。時には、前文は聖書からの引用と聖書への引喩をも含む。そのうちでも、国王ヴァルデマール一世（*Valdemar I*, 1157—1182）とその後継者クヌード六世（*Knud VI*, 1182—1202）のそれが最も興味深い。このように国王の司法権は、メシアのそれと比較され、クヌード王の臣民は、モーゼに率られ契約の地に導かれるイスラエルの民に、国王自身、同じく、正統に即位したソロモン王に比定されている。さらに国王は神から直接權威を与えられ、国王は神の姿（*imago Dei*）を示すと考えられた。⁽⁴⁴⁾

国王の印章と鑄貨を仔細に検討すると、この全期間を通じて国王が王の標識としての笏と宝珠とを保持し、さらに十三世紀中葉までには、国王は覆いのある王冠（*a closed crown*）をその表象としていたことが明らかである。このことは、ドイツ皇帝の模倣であり、イングランド、ハンガリー、スウェーデンの国王が行なつたと同様に、デンマーク国王は皇帝と並び立つ

ものであることを表明しようと思図したものであろう。また笏も皇帝の模倣であり、国王の鑄造した鑄貨にのみ認められる剣も同様である。ヴァルデマー一世の鑄貨に示された棕櫚の枝は、十字軍の象徴と考えられ、十二世紀から十三世紀初頭の鑄貨に認められる旗付の槍は、皇帝とデンマーク国王が対等であることを主張していることを示すものであろう。というのは、旗付の槍という表象は、皇帝が帝国直属の家臣の授爵にあたつて用いられていたからである。

さて、デンマーク国王が皇帝をまねている事実を国王の標識が示していることを我々は知るのであるが、さらに王を象徴する宝珠のいくつかは、二重の十字架(double cross)、即ちキリストの真実の十字架の表象と解釈される十字架をつけている。デンマーク王はこの標識を用いることを主張しているので、通常の十字架をつけた宝珠を持つ皇帝とは異なり、デンマーク国王こそ、真実の十字架の下に王の權威を神から与えられたことを誇示せんとしたとの推測が成立する。今日デンマーク王家の紋章である当時の副印(counter seal)は、たとえ一二〇〇年頃、ハンガリー王家の印章に同じ獅子と心臓の組み合わせを認めるとしても、デンマーク王家の創作と思われる。しかし両国の王家は二世紀にわたって密接な関係にあったことも記憶さるべきであろう。獅子と心臓の組み合わせは、特に正義の行使者としての王権を象徴し、かつ勅書の前文にみられるのと同様、そこに「神の似姿」(imitation of god)が認められる。

すでに考察したように、皇帝の模倣は、当時のデンマークの王觀念であつた⁽⁴⁵⁾。「神の姿」は、おそらくヴァルデマー一世によって導入されたのであろう。ヴァルデマーの王觀念の他の要素は、(紋章にみられる)王権の伸長と(棕櫚の枝という十字軍の象徴とおそらく神殿騎士団の旗印であつたデンマークの旗に象徴される)異教徒の回心であつた。王権とキリスト教の伝道の同様の結合は、リーベ大聖堂の巨大な浮彫⁽⁴⁶⁾(一一七〇年代)とヴァルデマー一世の父で、一一六九年に列聖された聖クヌード公⁽⁴⁷⁾(St. Knud Lavard, 1096—1131)を祝う礼拝式文とに認められる。

我々の取扱っている時期に、王家の一族の者の聖者の列に加える試みが屢々なされている。最も古いしかも成功した事例は、聖クヌード王⁽⁴⁸⁾(Knud IV [St. Knud] 1080—1086)で、その王弟エーリク一世(Erik I Ejegod, 1095—1103)の支持を得た教会の主導の結果として聖者に列せられた。この事例は、王権の名声の高揚を一般に企てたものと考えるべきであろう。他の多くの事例、例えば、聖クヌード公の場合、王家のある一族の一員を、その一族の名声を高めるために、列聖する試みであり、その一族の王位継承権の根拠となつたのである。他の諸国においても、例えばハンガリーやセルビアの場合、王家の一員を列聖するための同じ理由を見出すのである。教会は、新たにキリスト教に改宗され、教会を有効に保護する統治力の充分でない地域において、このようにして王権の強化を助けたのである⁽⁴⁹⁾。

王の観念は、また、一二〇〇年頃サクソー——我々はこの人物についてほとんど知らない——によって書かれたデンマーク史に表明されている。彼は、デンマークの王権の確立という役割では、フランスの聖ドニの修道院長スーヂェとも比較される人物、大司教アブサロン⁽⁵⁰⁾(一二〇一年没)の祐筆であった。おそらく、サクソーの観念はアブサロンの考え方を反映しているといえるので、サクソーの仕事は、一種の公的な歴史編纂と考えてよい。サクソーによれば、一一八五年、この年に彼の歴史は終るが、この年までのデンマークの政治制度には、二つの要素、即ち国王と国民とがあった。前者は国民の評判を損わないことを条件に自由に行動しえし、後者の役割は、国の指導者の統治能力を制御することであった。ごく稀な場合を除いて、デーマーク国王は、同じ王朝に属さない。通例、指名あるいはそれに類似の取りきめは稀で、王位継承は世襲か選挙によって行なわれた。王位継承にあたって能力原理がある役割を有し、このようにして軍事的功績が条件となり、未婚の女性は、単独で統治能力があるとは考えられなかった。長子相続の原理がある場合に認められ、ローマのモデルに従って抵抗権があった。運命の概念は、サクソーの著作において重要であり、運命が、神の權威の道具として働くことが認められる。他方サクソーは、古代の美德——勇敢、有徳、愛、冷静によって運命に対抗して戦うことを教えている。

四

ここで政治機関が実際にどのように機能したかを考察するた
め、我々の研究の最後の部分に入ることになる。王位継承に
関して、通例国王は、(少くとも一一七〇年以降)ルンドの大司教に
よって戴冠され、その際国王は、国法の遵守を約したことを知
っている。候補者の選挙は、地方の集会で形式的な選挙がなさ
れた後に、デンマーク全土から集まった貴族の集会でなされた。
候補者は選挙権者に、より特定の形で約束し、その義務が一
三二〇年代の国王選挙の特許状に書き連ねられたことを知って
いる。これらの選挙にあたって、支持を得るために、個々人や
ハンザ都市に対して候補者の約した義務を我々は知っている。
非公式に選挙を決定する貴族の機関は明らかに「メリオール
・レグニ」である。⁽⁵⁴⁾

立法の分野において、⁽⁵⁵⁾国王の発意の結果、法が成立したこ
とは稀であり、かえって、法は中世イングランドと同様、屢々
国臣からの請願にその起源を有している。⁽⁵⁶⁾一般法の場合には国
王と「メリオール・レグニ」の協力が、地域の場合には国王
と地方貴族の協働が不可欠と考えられた。かりに国王は都市に
法を賦与する上でいささか自立していたとはいえ、他の機関と
の協働のない国王の立法は、むしろ稀であった。一般的立法に
あたって「メリオール・レグニ」の影響は十二世紀末以来知
られていて、一二四一年国王と「メリオール・レグニ」の間⁽⁵⁷⁾

で立法権が公式に分割される遙か以前のことであった。

外交政策の点で、国王と他の機関との間に、ある協働が十二世紀以来存在していた。⁽⁵⁸⁾十三世紀中に、他の分野にも拡大した。即ちヴァルデマー二世 (Valdemar II, 1202—1241) 以降王領地の譲渡について、十三世紀中葉以降、レガリアの処分権について、一二八〇年代より封土についてみられたのである。十三世紀中の政治的協働の漸次的拡大は、国王財政悪化の増大によって惹きおこされ、とりわけ自由農民が保有農として貴族に託身する(このようにして国王は課税すべき臣下を失う)⁽⁶²⁾ことによってそうなのである。また行政権の分野において、現実の協働が、協働する義務の設定に屢々先行した。国王に対応する者として、十二世紀全体にわたって「メリオーレス・レグニ」があり、我々の取扱う期間の末に、「メリオーレス」の影響力を制限しつつ、評議会の著しい影響が増大した。しかし顧問官の非公式の影響は、全期間を通じて存在した。⁽⁶³⁾

司法権は、我々の取扱う全期間国王に属した。「メリオーレス・レグニ」や顧問官等の参与が極端に稀な国王の私的裁判権が存在した。⁽⁶⁴⁾他方、臣従の礼によって国王に直属した者すべてのために封建法廷が存在し、本来この法廷は近衛兵から構成され、⁽⁶⁵⁾後に(十二世紀になると)「メリオーレス・レグニ」から構成された。⁽⁶⁶⁾「メリオーレス・レグニ」が近衛兵と土地所有貴族から発展したことを考察したのであるが、事実上の司法権(後には承認された司法権)の分野において、「メリオーレス・レグニ」

が、一二八二年以降議會が、近衛兵の後裔であったことを確認することができる。国王の私的な法廷と封建法廷とが十二世紀以来共存していたのに対して、これら法廷の優先順位を規定することを企図して、ある規範が導入されたのは、一二三〇年以降のことであった。特に議會は毎年開催される封建法廷の厳粛な集会で、その際、他の案件を審理できるものと規定しうが、最上級の法廷として認められ、国王の私的法廷はその下位に、しかし地方法廷の上位に位置づけられたのである。⁽⁶⁷⁾

二世紀にわたって、我々はデンマークの国制上の発展を辿ってきた。国王以外の政治機関の権能についての公式の承認は、先行する発展の結果であり、その根拠は、政治的に受容しうると判断された慣行を固定し、あるいは、悪しき慣習と化することを防ぐということであった。同時に、国王と貴族の勢力均衡が、十二世紀末に国王に有利であった状況から、十三世紀中葉以降、貴族の重要性が増大するように変化した過程を辿った。この変化の理由は、おそらく、国王財政の推移に求められ、自立した農民が土地貴族の許に走り、貴族の保有農となり、国王の収入減となったことは、すでに言及したところである。教会の不輸入権の増大が、レガリア収入の減少を国王にもたらし、さらに封建軍に集中した体制が、傭兵隊と要塞とに基礎を置くようになった軍事的発展が、軍事的目的のためにより多額の貨幣を必要としたことを付言せねばならない。土地貴族に有利な経済力の移行は、政治機関とその権能に反映していることは当

然のことであつた。

- (1) 本稿は、一九七八年四月二十八日、東北大学においてなされた講演である。
- (2) 近衛兵の数についての議論は、詳しくは拙著を参照されたい。Thomas Riis: *Les institutions politiques centrales du Danemark 1100—1332*, Odense, 1977, pp. 228—232.
- (3) このことは、一〇八六年七月十日、オーランドの大聖堂において、国王聖クヌート、王弟とともに殺害された戦士の妻にうかがわれる。即ち十七名中少くとも四名はドイツ人であり、二名はフランドル出身と推定される。M. Cl. Gertz (ed.): *Vitae Sanctorum Danorum*, København, 1908—1912, p. 61, cf. *ibid.*, pp. 29—30.
- (4) Riis: *Les institutions politiques*, pp. 233—234.
- (5) この語は、一一三九—一一四〇年と推定される法に、初出である。E. Kroman (ed.): *Den danske Retslovgivning indtil 1400* (Danish Legislation before 1400) (以下 DRL と略記す。) København, 1971, pp. 58—59. この法は一一三九—一一五九年と推定される。Riis: *Les institutions politiques*, pp. 48—54. なお年代推定については拙著四八—五四頁「大逆罪にまつての後の法にまつては」二二八頁を参照されたい。
- (6) 最も初期の事例は、一一三九年六月二十五日の国王の書簡にみられる。Diplomatium Danicum (以下 Dipl. Dan. と略記す。) I 6 no. 98. 編者のニールス・スキューム＝ニールセン教授 (Prof. Niels Skyum-Nielsen) とロベンハーゲンにある「デンマーク言語・デンマークの国制」一一〇〇年—一一三三二年
- 文学協会 (Det danske Sprog- og Litteraturselskab, København) に対し、未刊行の草稿の利用を許可されたことと感謝するものがある。
- (7) A Krarup & W. Norvin (ed.): *Acta processus litium inter regem Danorum et archiepiscopum Lundensem* (以下 APL と略記す。) København, 1932, pp. 9 1. 15—30, 57 1. 1—4, 209 1. 35. cf. Niels Skyum-Nielsen: *Kirkekampen i Danmark 1241—1290* (The conflicts between King and Church in Denmark, 1241—1290), København, 1963 (2nd ed. 1971), pp. 91, 160—161. この証書は、一一五〇年代とそれ以降に属するものといふが、縁起史家によれば、国王にちよび召集が、一一三四年に、前掲のロベキンの年代記 (*Chronicon Roskildense*) に使用される。M. Cl. Gertz (ed.): *Scriptores Miores historiae Danicae medii aevi*, København, 1917—1922 (以下 SM と略記す。) I, pp. 28 1. 27—29 1. 2.
- (8) 一一七四年にならば、エーリック三世 (Erik III, 'Agnæus, 1137—1146) の私生兄ハンスの裁判にちよび、J. Olrik & H. Rieder (ed.): *Saxonis Gesta Danorum I*, København, 1931, pp. 509 1. 5, 15—18, 29—31; 510 1. 9—20; 512 1. 13. cf. Niels Skyum-Nielsen: *Kvinde og Slave. Danmarkshistorie uden ret-touche III* (History of Denmark 1085—1250), København, 1971, pp. 199—200.
- (9) APL, p. 291 §8 17—18; Dipl. Dan. II 5 no. 310 § 11.
- (10) APL, p. 40 1. 16—18: "Ici sit regie auctoritatis de consensu maiorum regni expeditionem indicare..." (一一三四年

年四月から一三五九年二月の間を年代推定せよ) cf. Skjumb-Nielsen: Kirkekampen, p. 128.

(11) 植民地を參照せよと Dipl. Dan. II 3 no. 170 (1286), II 8 no. 176 § 13 (1320), II 9 no. 273 § 8 12, 44 (1326).

(12) Dipl. Dan. II 5 no. 248 § 4 (1303).

(13) Dipl. Dan. II 8 no. 176 14; "Item ut nullus Teutonicus /castrum/municiones/exactiones/aut terras habeat/nec aliquo modo in consilio regis fiat stricto vel iurato."

(14) Saxo: Gesta Danorum I, p. 490 l. 6—11.

(15) Riis: Les institutions politiques, p. 255.

(16) Ibid., pp. 253—254.

(17) Dipl. Dan. II 5 no. 113 (1300), II 9 no. 424 (1327).

(18) DRL, p. 62 § 1, pp. 75, 96 § 1.

(19) Ibid., pp. 111 § 2, 124 § 2, 139 § 6, 157 § 9; Dipl. Dan. II 8 no. 176 § 26, II 9 no. 273 § 21.

(20) DRL, pp. 62—63 § 1, 69 § 1, cf. 76, 96 § 2; ibid., pp. 80, 99 § 16.

(21) Ibid., pp. 190 § 28, 216 § 23.

(22) Dipl. Dan. II 8 no. 176 § 37, II 9 no. 273 § 8 22, 46, Riis: Les institutions politiques, pp. 238—239 with notes 17—18.

(23) Riis: Les institutions politiques, p. 259.

(24) "Ujente et manente uno rege, rex secundus nunquam in Dacia eligatur, nec de futuro rege, caucio vel promissio fiat aequalis" Dipl. Dan. II 9 no. 273 § 26. 一三三一年の條に於てれたクリストフニ (Christopher II, 1320—1326, 1329—1332)

† 同年国外に居住した。

(25) Riis: Les institutions politiques, pp. 215—216.

(26) Dipl. Dan. I 3 no. 238.

(27) Riis: Les institutions politiques, pp. 216—217.

(28) Johannes Brøndum-Nielsen, Poul Johs. Jørgensen et alii (ed.): Danmarks gamle Landskabslove med Kirkelovene (The ancient Danish provincial law and ecclesiastical law), København, 1933—1961 (以下 DGL と略記す。) II, pp. 8—9. Skjumb-Nielsen: Kirkekampen, pp. 20—23.

(29) Dipl. Dan. II 8 no. 176 § 27 = II 9 no. 273 § 22.

(30) Riis: Les institutions politiques, pp. 218—219.

(31) Poul Johs. Jørgensen: Dansk Rehistorie (History of Danish Law), København, 2nd. ed. 1949, pp. 103, 334.

(32) DRL, pp. 79, 98 § 12.

(33) Ibid., p. 182 § 8.

(34) Riis: Les institutions politiques, p. 221.

(35) Dipl. Dan. II 6 no. 47, II 7 nos. 81—82.

(36) Dipl. Dan. II 6 no. 127.

(37) Dipl. Dan. II 8 no. 176 § 28, cf. § 35; II 9 no. 273 § 23, cf. § 36.

(38) DRL, pp. 80, 99 § 16, cf. Dipl. Dan. II 9 no. 273 § 29.

(39) Dipl. Dan. II 8 no. 176 § 30, cf. § 29; II 9 no. 273 § 34 cf. 24.

(40) DRL, pp. 58—59.

(41) Riis: Les institutions politiques, pp. 223—224.

な論点であった。 cf. Skyum-Nielsen: Kirkekampen, passim.
Riis: Les institutions politiques, pp. 291—297.

訳者あとがき

本稿は、一九七八年四月二十八日、東北大学文学部で行なわれた講演に基くもので、注の部分は、後刻リース博士より送付されたものである。講演の機会を与えて下さった東北大学文学部長吉岡昭彦教授、そのための準備の労を御取り下さった佐藤伊久男教授に感謝するものである。また今回も、訳出にあたって、デンマーク史、デンマーク語について、早稲田大学の村井誠人講師の御教示を得た。記して感謝したい。それにも拘わらず残された誤りは、訳者の責である。

なおリース博士の経歴並びに今回の国際的学術交流については、『立教経済学研究』第三十二巻、第二号に掲載されたトーマス・リース、鶴川馨訳「デンマーク中世都市の法的・社会的諸問題」の訳者あとがきを参照されたい。